

イエスと女性たち（ルカ八・一〜三）

（なにわ聖書研究会） 佐藤 全弘

（これは、二〇一七年三月二六日、浜松市のクリエート浜松二二号室で開かれた浜松聖書集会で、述べたものです。司会は水戸潔氏、讃美歌は三一二番と二九二番を唱和しました。）

浜松集会で聖書の話を致しますのは今日が初めてです。しかし、浜松集会との交わりは、ずっと前から続いておりました。

今年で召されて十年になられる溝口正先生とは、かねてから文通があり、先生の戦争体験、戦後の信仰生活と反戦活動などについても種々教えて頂きました。また小谷純一先生が九十歳を超えられて最晩年に、愛農会の問題で社団法人の規約を超えた行動を取ろうとされた時、私

は反対でしたが、溝口先生も小谷先生からの問い合わせに反対を表明され、志を同じくする方の存在に心を強くしたことを思い出します。その後もずっと信仰誌（「みぎわ」と「関西合同聖書集會会報」）の交換は、春江様を通して続けられています。

今日は初めてこの集會に寄せていただき、一場の講話をする機会をお与えいただき、心から感謝申しあげます。

一 イエスに仕える女性たち

ただ今司會者がお読み下さった、ルカ福音書八章一〜三節には、三人の女性の名があげられ、そのほか、多くの婦人がイエスの伝道に付き従い、奉仕したことが、簡潔に記されています。

イエスは三十歳ごろにナザレの村大工をやめ、父なる神の召しに応じて、伝道に専念されまし

た。故郷のナザレでは村人の拒絶にあわれましが、ガリラヤの村々、ガリラヤ湖周辺の町々を巡回して伝道をなさり、丘へのぼり湖畔に降り、あるいは湖に小舟を浮かべて岸边に集う人々に教えを説き、会堂での伝道は次第に拒まれましたが、天然の野や山での説教は輝きを増し、十二使徒は選ばれて従い、平野の福音は貧しい人々、飢えている人々、泣いている人々、憎まれている人々に幸いの福音を与え（六・二〇〜二六）、癒しは弟子の数をまし、喩えは人々の魂に刻みつけられ、イエスは弟子たちと巡回伝道を続けてゆかれました。

しかし顧みるとき、イエスに従う弟子たちの数が増してゆくとき、そして巡回伝道がそれら多くの弟子たちと共に行われてゆくとき、それに加え弟子たちは皆家を出てイエスにつき従ってゆくことを思うとき、その日々、生活は、どうして、営まれたのか、が心配になります。

食事は、大勢の人々の食事はどうして得られたのでしょうか。イエスはフアリサイ派の人々の

招待にも進んで応じられますが、それは毎日のことではありません。

毎日の宿はどうされたのでしょうか。ザアカイのような金持の招待が毎日あるわけではありません。野宿もあつたでしょう。それでも夜の寒さを防ぐ手だてが必要です。長く続く伝道の旅とあつては、衣料の洗濯も必要です。弟子の数がふえるほど、それも一苦勞となるでしょう。誰が洗ったのでしょうか。綻びは誰がつづくたのでしょうか。大勢の長旅では必ず病人も出ます。命にかかわる程でなくても、手足に怪我をしたり下痢を起こしたり、逆に水の補給が足らず便秘になったり、それらの世話は誰が受けもつたのでしょうか。

福音書に、この伝道の旅路でそれらを引受けて奉仕した人たちのことには、ごく僅かの言葉しか費やされていません。―今日学んでいるルカ福音書八章の一〜三節は、ルカの特種であり、それら毎日のことに光を投じてくれる貴重な箇所です。

伝道の旅に家を捨てて付き従い、それら毎日消えてゆく無くてはならぬ仕事に従事した女性たちの名が、三人までも挙げられているのです。三人だけでなく、名は挙がっていないくても同じ奉仕に尽した女性たちが多くいたことも記されています。

彼女たち―何人いたか数は書かれていませんが、イエス一行がもし百人なら、少なくとも十人から二十人の女性が旅を共にし、日用の業に奉仕したはずです。イエスは彼女たちの奉仕を嘉納されました。彼女たちを抜きにしては、イエスの伝道旅行はできなかつたと言つても言い過ぎではありません。

彼女たちこそは、イエスの十字架の苦しみを逃げもせず見届け、アリマタヤのヨセフの新しい墓に遺体が葬られるのを見定め、三日目にはイエスの遺体に香料と香油を塗るために、明け方早くそれを携えてエルサレムの町の外の墓地へ、連れ立って赴いた人たちでした。十二人をはじめ、男の弟子たちは、ヨハネを除いてほと

んどイエスを見捨てて逃げさり、エルサレム市中の、あの最後の晩餐が行われた二階建の家に隠れ潜んでいたのでした。事に臨んで女性の方が勇気があり、イエスの恩をしっかりと感じ、身も心も投げ出していたことがわかります。

三人の女性の名を順に挙げますと、マグダラのマリア、ヨハナ、スサンナです。みな「悪霊を追い出して病気を癒していただいた」婦人たちです。順に見てゆきましょう。マグダラはガリラヤ湖畔のティベリアから北五キロにある小さな港町で、マリアは「七つの悪霊を追い出していただいた」女性です。性の悪い病気を七つも背負い込み、それをイエスに治してもらいました。七つもの病気に苦しんだとあるからには、

年齢もさして若くなく、三十前後とみられます。復活のイエスと最初にお会いしたのも彼女です。ヨハナは「ヘロデの家令クザの妻」と紹介されています。このヘロデはヘロデ大王とサマリヤ婦人マルタケとの子で、ヘロデ大王の死後ガリラヤとペレア（ヨルダン川のサマリヤの東側

の地)の領主を紀元前四年〜後三四年までつとめたが、イエスを敵視し、^{ずる}狡く、洗礼者ヨハネを斬首しました。イエスは彼に狐と渾名をつけられました。

クザはこのヘロデの家令でした。家令とは、日本では平安時代に親王、内親王、公卿家の事務を司った職をいい、明治以降でも旧皇族、華族の家で家事を管理した人を指しますから、ヘロデの領土及び収入の管理をした高官を指します。その妻がヨハナですから、今の日本なら宮家の事務長夫人に相当しましょうか。イエスの救いは敵の中枢にまで及んでいたのです。ヨハナはマグダラのマリアよりずっと年上で、五十前後と考えられます。

もう一人のサンナは、ここだけに名が出ていて、詳しいことは判りません。しかし彼女につづいて「そのほか多くの婦人たちも一緒であった」とありますから、やはりイエスに難病を治してもらい、家を出てお仕えしていた女性と考えるとよいでしょう。

ルカがここに名をあげた三人の女性は、それぞれ異なる、た、経、歴、の持主です。小さいとはいえ王を名乗る人の高官、夫人、数多くの病気に永年苦しめられ(たぶん未婚の)さして若くもない婦人、そして特に言う、こともない、婦人、イエスの弟子にならなければ、この三人が交わることはありえなかつたでしょう。とうてい一緒に生き、話し、働くことなど無理な人々です。

男性でもその傾向はありますが、女性では、とくに二千年前では、今では想像できないほどのその傾向は甚だしかつたと思われまゝ。とくに結婚していれば夫の地位、で自他共に目に見えぬ垣根を築いてしまいます。(総理大臣夫人だと特に何の人徳もなく、むしろ時代錯誤的な人であつても、ちや、ほ、や、して歓迎する日本など、二千年前と同じでしょう)。

イエスという方は、むしろイエスの福音は、すべての人々の間の垣を撤去してしまわれるのです。それも各人の個性を失うことなく。男弟子は十二弟子をはじめ大勢いましたが、それは

皆イエスが、「私に従って来なさい」と召し出された人たちで、ペトロとアンデレのような漁夫もおれば、マタイのような税吏もおり、またユダヤの極右愛国党人のシモンもいるというふうに、種々雑多な前歴の持主の集合でした。ペトロなど文字に詳しくない人もいれば、錢勘定にも帳付けにも堪能なマタイもいるといった、寄せ集めでしたが、イスカリオテのユダ以外は皆、のちに心を合わせ、命を捧げて、一つ心で福音伝道のために尽したのでした。

これら男弟子たちが迫害を恐れて逃げ隠れていた時に、ここに名の出た二人は（つまりマクダラの MARIA、ヨハナは）、ヤコブの母マリアそのほかの婦人たちと共に、イエスの十字架、葬むり、復活にも心を合わせて証人となり、男弟子の隠れ家にもその事を知らせに行ったのでした。つまり彼女たちは初代教会の重要メンバーだったので（ルカ二三の四九、五五、二四の一〇参照）。もちろん、ルカが名もあげなかつ

た女性たちも、その純心と無私の勇氣は慕わしいものでした。

「彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた」（八の三）とあります。ヨハネ福音書十九章二十三節〜二十四節によれば、イエスが十字架につかれる時着ておられた下着は、「縫い目がなく上から下まで一枚織り」の上等だったので、イエスの服を皆で分配していた兵士たちも、その下着は裂かないでそのまま、じ、引き、で決めたのでした。この下着はイエスが家で着ておられたはずもなく、あるいはルカがあげている高官夫人ヨハナが差し上げた物だったかもしれませぬ。

この八章三節の塚本訳では、「女たちは自分の財産を持ち出して、みなを賄った」とありますから、奉仕の中にはご馳走のお、ごり、もあつたと考えられます。

イエスは付き従った女性たちのこれら衣食への配慮を、よろこんで受けられました。ルカ七

章 34 節でイエスご自身がフアリサイ派や律法

学者たちのイエス批評を述べて「人の子が来て、飲み食いすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言う。」と仰有っておられますから、イエスは禁欲家ではなく、無理はなさらず、捧げ物は喜んで受け、何も無ければそれは、それで我慢なさる自然な生き方をよしとしておられたことがわかります。

こころカ福音書八章一―三節に記されている女性たちが、衣食をまかなっただけでなく、伝道旅行で疲れたイエス一行をいやし励まし、心的、身体的に力づけに励んだことも十分想像できます。ひよっとすると、イエスに衣服やごちそう、楽しい会話や病状報告で多くの口を利いたマクダラのマリヤやクザの妻ヨハナよりも、イエスの視線を受ければ微笑み返すばかりだったサンナが、一番イエスと心が通っていたのかもしれない。

二 背後で支える人の重要性

日本にプロテスタントのキリスト教が入ってから、今年で一五八年になります。一八五九年（安政六）にアメリカ長老教会のJ・C・ヘボン、アメリカ・オランダ改革派教会のS・R・ブラウンらが相次いで渡来したのが始まりです。カトリック教会の宣教師の来日は、ご承知のようにフランシスコ・シャヴィエル（一五〇六―五二）が一五四二年インドで布教、四九年八月ヤジロウと共に鹿児島に上陸、上洛して天皇・将軍に会い布教の公認を得ました。しかし、朝廷も幕府も力を失い、京都も荒廃しているのを見て西の大内義隆に会い、また大友宗麟に招かれ、日本に伝道を志しました。しかし日本教化の為には学問の源たる中国布教が大切と、一旦インドへ戻り中国に渡り、広東附近で帰天しました。

以後カトリックの諸会は相ついで日本に布教を行い、一六〇〇年頃には人口二七〇〇万の日本で東国には組織的布教は進んでいないにしても、すでに三十五万の信者を得ていました。そ

れから二五〇年後、隠れキリシタンが教会に復帰するまでの歴史を見れば、日本人の信仰心の程がうかがわれます。

信仰は山籠り苦行僧のように、たった独り人跡稀な奥山に潜み、瞑想にふけり読経に明けることで達しられるものではありません。男女相扶けて、互いに支え合いつつ、社会の必要に応じ、神の求めにこたえ、与えられた力を世の為人の為に十二分に用い尽すところに、信仰は達せられます。

信仰は独りで果たすことは出来ません。必ず友を求め力を与え与えられてこそ、神の御旨に応じることができなのです。そこに、信仰に立つて神の召しに応じ働く人の背後にあって、その働きを支える人の重要性があります。神もそのような人を切に求めておられます。

日本人の中から、私たちのよく知るキリスト信徒で、神から支える人を与えられ、共々力を出し合って、御旨にこたえ働きぬいた人の例を四組あげましょう。

① 新渡戸稲造とメリー夫人

新渡戸稲造（一八六一―一九三三）は札幌農学校二期生として卒業して、約束通り開拓使に勤め働いていましたが、ほどなく中央の政紛で開拓使が廃止され、上京して東京大学に入ったものの、教授も学生も農学校より劣るので一年で退学し、一八八四年私費留学をしました。東部のジョンズ・ホプキンス大学で経済学、史学等を三年間修め、その間ボルティモアの友会会員として認められ、日本人友会徒（クエーカー）の第一号となりました（一八八六年二月九日）。
ジョンズ・ホプキンス大学の規定の年限を終えぬうちに、母校札幌農学校の助教に任ぜられ、ドイツ留学を命じられ渡欧します。

在米中にクエーカーの名門の子女メリー・エルクinton（一八五六―一九三八）と知り合い、大西洋を渡ってドイツ留学中大西洋をこえて手紙を交換しているうちに、双方の理解が進み、留学を了え学位を得て渡米し、一八九一年一月一日フィラデルフィア市でメリー・エルクinton

ンと結婚し、同年二月帰国し、三月母校農学校の教授となりました。メリーの両親はもちろんクエーカーでしたが、遙か東洋の端の日本の北の島に住む稲造に一人娘（下に第四人あり）を手離すのに反対で、結婚式にも出ませんでした。

メリーは日本に行けば日本語をすっかり学んで、読み、書き、話して夫を助け、日本の女性の為にも尽そうと決意していましたが、日本に着いて学ぼうとすると、余りの難しさに途方にくれました。文字も大文字小文字各二十六文字のアルファベットと違い、片仮名平仮名各五十文字、而も文字と発音はまた異なり（たとえば、セウガクシヤウカは小学唱歌と書いてシヨウガクシヨウカ）、漢字は四千字は覚えねばなりません。メリーが稲造と結婚したのは彼女三十五歳の時です。記憶力ももう十分ではありません。なお二人の間には男子遠益が生まれましたが生後八日で死に、以後実子は生まれず、養子養女をとることとなりました。

メリーは決心しましたー日本語の勉強はもう中止しよう。その代り、英語を活用し、稲造に必要となる西洋人との社交を担当し、稲造の財産管理にあたるなど、内向きに支える仕事を十分果たすことにしよう。稲造が一九三三年に召されてから、メリーは稲造の弟子・友人の助けをうけながら、夫の書き残した英文著作を三点四冊、序文を自ら書いて出版しました。

Reminiscences of childhood (1934) 、 *Lectures on Japan* (1936) 、 *Editorial Jottings, two vols* (1938) です。

稲造が七年間国、際、連、盟、の、事、務、次、長 (Under-Secretary General of the League of Nations) としてジュネーヴの連盟本部全体から尊敬を集め、一度行われた人気投票では第一位となった背景には、メリー夫人の内助の功が大きかったことはまちがいありません。メリーは夫の死後五年生き、稲造の為残した仕事を果し終えたことは、忘れることはできません。札幌の遠友夜学校の校長も務めたのですから。

②内村鑑三と静子夫人

内村鑑三（一八六一—一九三〇）は三度結婚しました。最初の結婚は群馬県高崎の隣町安中市生まれの浅田、夕、夕、夕、と一八八四年三月二八日にしました。浅田は女学校出の才媛で、キリスト教徒でしたが、勝気で明るい性格で夫にも平気で物を言うたちでした。内村家に嫁いで半年で彼女は内村家を出てしまいました。姑と不仲でしたし、小舅こじゅうと小姑こじゅうとめがおり、胎内には子もいません。結婚式に新渡戸は出席しましたが、「二人の仲については出会った時話す」と宮部宛の手紙に書いています。

事実上離婚して二月ふたつきで内村はアメリカへ旅立ちます。心の傷を癒すためもあつたでしょう。二十三歳でした。ペンシルバニア州エルウインの白痴院の看護人を半年つとめたのち、アマスト大学に入り、シーリー学長の助言に十字架信仰に目覚め、在米四年で帰国し、新潟北越学館仮教頭となるも五か月で辞任、一八八九年七月

高崎の横、浜、加、寿、子、と結婚しました。二十八歳でした。

翌一八九〇年九月、第一高等中学校教員となるも、翌年一月教育、勅、語、不、敬、事件、が起こり、天皇親署に礼拝低頭しなかったことで、忽ち校内の生徒、教員の批判をあび、社会問題となりました。内村の看病で風邪が憑うった妻加寿子は四月十九日、結婚一年九か月で死に、内村は職も失い、国賊視されて全国を流浪する火の洗、礼をうけます。

その流浪中、一八九二年十二月、京都の弓の師範の長女岡田静子と結婚し、静子はなお四年つづく流浪生活にも耐え、三度餓死の決心を共にして、以後内村に伝道の天職を全うせしめました。

二人の間にはル、ツ、子、と祐、之、の二子が与えられました。しかしルツ子は女学校を出たあとすぐ不治の病にかかり、十七歳で永眠しましたが、祐之は一高の野球選手（投手）となり、東京帝大では医学（精神病学）を修め、ドイツ留学を

も果たし、北海道帝大教授から東京帝大教授となり、プロ野球コミッショナーにもなりました。子供も五女一男を与えられています。静子は一九四五年二月に召されました。

③ 藤井武と 喬子^{のぶこ}夫人

藤井武を藤井武たらしめたのは、ほかならぬ喬子夫人であることは、よく知られたことです。しかも、生前の内助の功というのではなくて、内村も新渡戸も内助の功でしたが、すでに、天に、移された、喬子夫人の、靈的、激励と、護り、であるのが重要なことです。

藤井武は一八八八年一月十五日金沢に生まれ、歩兵第七連隊騎手歩兵少佐浅村安直の次男でしたが、十三歳の時父が胃潰瘍で重患となったので、同じく石川県士族の藤井鉄太郎の養子となり、但しずっと実家で暮しました。

県立中学を首席で卒業し、一九〇四年九月第一高等学校（英法）に入学し、東京に移った実家に同居、翌年養父死去、養母出京したため大学卒業までその家に同居しました。

一九〇七年六月一高を卒業し、東京帝大法科政治学科に入り、その翌年一九〇八年十二月同じ石川県士族西永公平の長女喬子（十四歳）と婚約しました（武二十歳）。

一九一一年六月東京帝大を卒業、八月金沢市で喬子と結婚、東京に新居を構えましたが、十一月京都府試補となり、翌一九一二年六月長女ゆり子が夫人実家で生まれました。藤井は子沢山で、一九一四年十一月に長男 洋^{ひろし}が山形で、一九一七年三月次男 立^{たっ}が東京市外で、一九一九年九月東京市外中野で三男 明^{あかし}が、一九二二年一月次女園子が東京市外駒沢で生まれ、計三男二女を十年間に与えられたこととなります。

次女園子を生んだ一九二二年の十月一日、十歳のゆり子から当歳の園子まで五人の子を武に託して喬子は逝きました。

喬子は何事にも積極的で、武が伝道計画に心を悩ましていると、傍にきて、「よろしいわ、やりましょう」と励ましました。

また武が胃の病の養生に小田原に移り転地療養している時には、たえず手紙を送って病状を尋ね、家の様子、子供の状況を伝え、祈り、計画を相談し、互の意思疎通に心を尽しました。その喬子が夫と子五人を残し一九二二年十月一日家から失せて、神の仕打ちに心悩ます武を、

天から励まし続けたのが在天の喬子の霊です。

喬子が召天して半年後の一九二三年四月号の『旧約と新約』巻頭に、「羔いひつの婚姻」第一歌が歌い出され、一九三〇年七月武が世を去るまで、毎月歌い続けられるのです。それは武の思想と研究、信仰と心情が注ぎ出され、天地創造の原始から新天地の創造に至るまで、聖書をふまえ、歴史の歩みに応じ、藤井夫妻自身の婚姻を通奏曲として、ダンテの『神曲』の一四二二三行に一五〇〇行短かく、ミルトンの『失樂園』の一〇五五八行より二二〇〇行長い、日本語で表された最深、最長、最美の一二七九五行の信仰詩です。もし、四十二歳でなくもう八年、五十歳

まで生きておれば、ダンテの『神曲』を超える長詩となったことでしょう。

おそらく日本語が今後千年続くとしても、喬子と武の共作ともいうべきこの『羔の婚姻』にまさる信仰詩は生まれないであろうと思われるのです。

④ 矢内原忠雄と恵子夫人

矢内原忠雄（一八九三—一九六一）は今の愛媛県今治市松木に生まれました。兄が教員をしている神戸一中から第一高等学校一部甲類に一九一〇年九月に入学し、新渡戸稲造校長の薫陶を受けました。一九一三年東京帝大法科大学入学、一九一七年三月同卒業、四月住友総本店入社、別子鉱業所勤務、五月藤井喬子の妹愛子と結婚、翌年五月長男伊作が生まれ、一九二〇年七月次男光男が生まれました。

この年一九二〇年三月に、前年新設の東京帝大経済学部助教授になり、八月から植民政策研究のために二年間米、英、独へ留学しました。

その留守中、一九二二年十月一日藤井武の妻喬子が世を去り、その病床、死後に手伝った愛子も発病し重症となります。矢内原は妻がほとんど手紙をよこさないのを日記にも不平に思っていました。急ぎ帰国し、二月九日愛子を病院に見舞いますが、二月二十六日愛子は世を去ります。

愛子を多磨墓地に葬り、小さい伊作・光男を西永家に託し、十月からは新渡戸稻造が担当していた植、民、政、策、を代って受けもちます。新渡戸は一九二〇年五月国際連盟事務次長となり、ジュネーヴに滞在していたからです。

藤井武は、自分と喬子のように矢内原も愛子を生涯唯一の妻とすることを望み何通も手紙を書きました。忠雄は芦屋の堀米吉の四女恵子と再婚するつもりで文通を重ねており、愛子の死の翌年一九二四年六月に、恵子と再婚します。忠雄は藤井武と異なり寂しがり屋、で年も三十一歳だったからです。武はそれ以上忠雄に求めるこ

とはなく、忠雄は前同様武の集會に出ておりました。

しかし、この一事の背後には、当人の意向をこえて歴史全体を動かしておられる天地創造の神の御旨が働いていたと考えられてなりません。一九二六年十二月二十五日大正天皇は死去し、世は昭和となり、日本では軍部と右翼の力が増し、政治家・財界人の暗殺が相続き、二・二六事件などの軍部の蜂起も起こり、遂に一九三七年七月七日、日中戦争に突入し、平和の緒す^{いとち}ら見出せぬまま、独裁国ドイツ、イタリアと組んで軍備も民生もとのわぬなか、一九四一年十二月八日には英・米・オランダ（結果として連合国全部）と開戦するに至り、一九四五年八月十五日の徹底的敗戦に至るのです。

この間にあつて、正義と平和の旗を高くかかげ、天地創造の主の御旨を覆うことなくまげることなく、ペンと紙をもって、特高警察と官憲の暴力と非道を相手に戦い抜いた少数の人々がいました。矢内原忠雄もその戦線へと召されて

闘った一人です。その戦いにあつて、忠雄を背
後で支えるだけでなく、特高の呼出しにも代わ
つて訊問に応じ、戦災で印刷所も製本所も焼け
ゆく中、読者から紙の寄贈をおおぎ、ガリ版に
鉄筆を振るい、仮綴じの「嘉信」を敗戦までほ
とんど毎月全国の読者に送り、共に祈り、共に
励まし、共に神の国を待ち望んで戦い続けた矢
内原忠雄の戦列の中に、恵子は終始共に在った
ことを思うとき、御はからいの厳しくも賢く、
選ばれた戦士を励まし護られること堅く、かつ
慰めを施されることあつき主の 聖手^{みて}を、感ぜ
ずにはいられません。

キリストにあつては、役立たぬ才も能力もあ
りません。主の支えによつてこそ小さな力も
万鈞^{ばんきん}の圧力に耐えうるのです。またその支えが
なければ、何人^{なんびと}もその仕事を一週間と続けるこ
とはできないのです。

内村鑑三の『愛吟』中の、無名氏作「或る詩」

＜A POEM＞の中の一節をここの結びに引きたいと
思います―

「小なるつとめ小ならず
世を 蓋^おふとても大ならず
小はわが意をなすにあり
大はみむねによるにあり」

三、イエスの女性観

① 母マリアの信仰

この項の初めに新渡戸稲造の逸事を引きまし
よう。新渡戸が第一高等学校校長をつとめたの
は、一九〇六年の九月から一九一三年四月です。
秋の運動会するとき、新渡戸は校庭の周りにずつ
と長椅子を並べて、参観にみえる生徒の親、特
に母親の席としました。新渡戸校長以前の参観
者はずっと立っていたのでした。

これを見て蛮柄の運動部の生徒が言いました
―「新しい校長は女を可愛がる」。この事を耳
にした新渡戸は、次の土曜の校長講話のときに
全校生徒に言いました―

「運動会に椅子を出したことで、諸君の中とか、
く、の意見があるようである。女という諸君た

ちはどう、いう、女性を、思い浮かべるか知らぬが、我輩は年老いた母親を想い出す。年とつた老人に立ったまま長時間運動会を見てもらうことあるまい。」

これには運動部の 猛者^{もさ}連も一言の言葉も出さず、以後運動会にはいつも長椅子が並べられました。新渡戸は七人の兄弟姉妹の末子で、九歳の時叔父太田 時敏^{ときとし}の養子となって盛岡を離れ上京し、その後札幌農学校へ入るときは東京から船で小樽へまわり、以後三年を終わり十年ぶりで札幌から帰郷した時は、途中あちこち立ち寄って帰り、帰宅した時は五十八歳の母は亡くなり葬儀も終わり納骨された翌日でした。新渡戸はその時卒倒したと述べています。

母の命日七月十八日には家の一間をしめ切り、床の間に写真を飾り、香をたき、母のことを終日偲びました。家族もこの聖なる時を妨げぬよう配慮しましたし、外遊時も母の写真と幼い時に母からもらった手紙を巻物にしたものを持参し、偲ぶことを忘れませんでした。

善き信仰者には善き母が多くあります。洗礼者ヨハネには母エリザベト、テモテには祖母イースと母エウニケ、アウグスチヌスには母モニカがいました。母の想い出を大切にしたいものです。

イエスの母マリアは、男児四人女児二人以上（以上というのは原文では複数形で名が出ておらず、或いは三人、四人かもしれぬ。マルコ六・三）がいた家庭をやりくりし、日々忙しく家事に励むとともに、安息日には会堂で教えを聞き、家では子供たちを愛をこめて育て教え、とりわけ子供たちにユダヤ教の信仰の話は自ら語ってきかせ、善き家庭の中心となりました。夫ヨセフとは年もかなり離れ、夫はイエス十二歳の時以後は全く姿を聖書に現さず、おそらく早く亡くなったと思われる。三十歳そこそこの大工の仕事を離れ伝道に家を出たイエスの心にも、すでに五十歳近かったマリアのことは、いつも心にあつたに相違ありません。（パレスチ

ナあたりの古代の平均寿命は男二十五歳、女四十二歳ですから。)

② 仕えるために来れり

イエス・キリストは、私たち罪人の罪を担うために、徹底して仕えるためにこの世に人となつて降られました。そして、子沢山の家庭の長男として、年若い父ヨセフには早く先立たれ、母を助け、少なくとも五人いる弟妹を導き、父に代わつて仕事も教え、己を無にして仕え抜かれました。

父なる神が、罪にまみれた人間を救うために、ついに十字架上にその独り子を死なせることを選ばれたからです。

平和に、心貧しく、己を空しくすること、それこそはまた古代パレスチナの女性の徳でもありません。

イエスの男弟子たちは、あの最後の晩餐の過程の席で、イエスが神の国のことにふれられたとき、互にそこでの位の高低のことを言い争い

ました(ルカ二二・二四〜二六)。イエスは上に立つ者は仕える者のようになれと言われたのに、弟子たちはそれを悟りませんでした。

ローマ帝国がキリスト教を国教としたとき、教会は仕える者、となるというこの本来の使命を忘れてしまいました。会堂をさかん壮にし、財宝を貯え、儀式を美しくし、また教義の些少の違いで互いに争い合い、信徒もまた高きに座する教会の上位の者に仕えることに汲々として貧しき者、困り果てている者、弱き者に仕えることを忘れてゆきました。

本来、イエスの父なる神は、支配、君臨、独裁、の父ではなかったのです。父、というイメージを用いて神を表すことになったのは、当時の文化の様態によります。

イエスの父は、平等な共同体を作る父なのです。その愛の、共同、体にあつては、お互を友と呼ぶのです。救い、においては、男も女も差別はありません。(ガラテヤ三・二六以下)。清、め、に

において男女は平等なのです（一コリント七・一三以下）。愛の共同は文化を超えるのです。

またイエスには女性的、と思える特性があります。一身を捨て人間を救おう、養おうとされるのは、子を思う母親のようです。至らぬ我が子を憐れみ、同情を施してやまぬイエスの心は、「くずの子ほど可愛い」という諺とも通じるものがあります。

イエスは人間に与えられている秀れた美質の全体を抱懐しておられる、と思われるものがあり、或る意味で男女の別を超えておられると言ってもよいものが見られます。

③ 創造における平等

そのことは創世記一章二十七節の人間、創造ののところから汲みとることができます。

「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。」

これは創世記の二章四節以降の人間創造物語とは異なります。二章四節以降の人間創造史においては、まずアダム（男）が創られ、そのアダムの肋骨の一部を深い眠りに陥らせて抜き取り、その抜き取り跡は肉でふさぎ、抜き取ったあばら骨で女を作りあげられた、とされています（二章二二節）。二章の物語の方が時代的には古く、一章の物語は天地創造から整然と光、水、天、海と陸、植物、日と月と星、生物と創られ、第六日に愈々人間を創り陸と海のすべての生物の世話をさせ、第七日には安息日とされたことが記されています。

人間の創造こそは、神の天地創造（宇宙創造）において、この宇宙のこの太陽系のこの地球という特殊の星を含む星々の歴史においては最終、創造の御働きであったといえます。創造に当り、地球の歴史上出現した生物の幾千幾百万種のもの的一切関わりなく、一種特別の生物を創ることも、神にはお出来になったでしょうが、億百万年の時間も一瞬と等しく同時とみそなわ

す神にあっては、やはりこの地球の条件にかな
い、その中の諸条件を満たして登場した生物の
内から、御心にかなうものを選ぼうと考えられ、
幾百万年の試練の末、全き人間をこの地上に産
まれさせられたのでした。

その意味で、「男と女に、」分けて創られた人
間は、どちらも神の、似姿、として *Imago Dei* とし
て、共に神の御心の下にあり、その思召しを受
けて、相補い、相助け、相愛し、この地上に神
の国の模範を創るべく、努力してゆくのでした。
神はその努力の歩みである歴史の中に、人を起
し、徐々にしかし確実に、御国の姿を実現して
こられたのでした。

ユダヤ社会は古代においては男性優位であり、
そのことは中世も近世の初めまでも変わりあり
ません。それでも、創世記三章の記載によれば、
男性優位、女性従属は神の人間創造の初めから
ではなくて、禁断の実を食べた墮罪の後に生じ
たとされています（三・十六）。

社会が男性優位か女性優位かについては、更
に神話時代まで遡れば、古代民族においては多
種多様でありました。日本神話では女性神たる
天照大神が最高神で、その弟の須佐男命は男
神ですが、姉の住所である高天原たかまがはらで暴行を繰
返し、地へ放逐されてしまいます。とすれば、
男女の優劣は時代と民族と社会によって多様で
ありうるというのが事実でありましょう。

創造における男女の平等ということを考える
に当たり、ここでもうしても次のテーマをお話
ししなければなりません。

④ 神における女性性と男性性

ここであげた「女性性」と「男性性」は私の
造語です。「女性性」とは「女性であること」
“女性たるにふさわしい性質” “女性らしき特
性”と日本語で表現される意味すべてを包括し
たものを指します。英語でいうなら

Womanliness、ドイツ語でなら Weiblichkeit だ

しょうか。「男性性」の方は *Manliness* と *Männlichkeit* でしょうか。

「神にかたどって創られたもの」神の似姿 (*Imago Dei*) として創られたものが男女という人間だとしますと、神はただ男らしい、者ではなく女らしくも、ある者といわねばなりません。神の似姿は男と女という二様ですが、神御自身はこれら二様のあり方を、一様の存在の中にもっておられるお方なのです。

神がそうであられるならば、その独り子イエスも、同じであります。イエスの内には、この女性性と男性性が矛盾することなく、一が他を失わせることもなく、全き人間の輝きが、厳しさと優しさが渾然一体となった姿を通して輝き出ているのです。

聖書は、福音書はそのことをよくよく示しています。

ルカ福音書でいいますなら、九章五十一節でイエスは十字架につく心を決め、エルサレムへ先立って進んでゆかれました。その途中イエス

は十二弟子たちを呼び寄せて、三度までも自らの受難と死と復活を予告されましたが、十二人はイエスの言葉を理解できませんでした。

エルサレムに近づき、都が見えたとき、イエスは都のために泣いて、エルサレムは亡び、石の上に石一つも残らず崩れてしまうと預言され嘆かれました(ルカ十九・四十一以下)。

またラザロの死を泣くマリアを見、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見ては、イエスもまた涙を流されました(ヨハネ十一・三十五)。

イエスの内に画期的な救いの教えを見出し、その御心の内に男女一体となった全き人間の働きを味わい知り、イエスの父なる神は人間の父とは全く異なるお方だと信じるに至った婦人たちは、欣然としてイエスの御供をし、奉仕に力を尽し、病める人、年老いた人、貧しい人、幼い子供たちのため、心も物も力もその有りたけを傾けて、イエスのお働きにお手伝い申しあげたのでした。

イエスこそ、まこと、の神、が遣わされたお方、父なる神の御意を最もよく知っておられるお方だと彼女たちは確信したのです。

イエスこそは、まこと、の人、神における女性、と、男性、性をここに地上において、完全に具現しておられるお方だと、彼女たちは確信したのでした。

婦人たちが直感したように、イエスの女性観は画期的なものでした。それは、旧約聖書の教えるところを超えていることが明らかに示されます。

旧約聖書では、女性は父に従い、（出エジプト二一・七では父が娘を売ることを認めています）、夫に、治められる、（創世記三・一六）者とされています。女性は直接ラビに質問して聞くことは禁止されていました。

古代ギリシヤでも（マケドニアは別として）、女性は一般に閉鎖的で、無教育で、財産権も参政権ももっていませんでした。（例外はもちろ

んあり、ソクラテスの妻クサンティッペは怒りっぽく、夫を口汚く罵ったりしましたが。）

イエスは婦人たちに新しい、自由を与えられた。婦人たちの病を癒やし（たとえばペトロの姑）、教えを直接与え（ヨハネ福音書四章のサマリヤの女）、マルタの妹マリアにも親しく教え（ルカ福音書一〇・三八以下）、罪の女を救い（同七・三六以下）、家事を祝福し、女性の奉仕の業をほめ、レプタ二つをさいせん箱に入れる貧しい寡婦に目を留め（同一一・一〜四）、ナルドの香油を惜しまずに注ぐ女性をほめておられます（マルコ福音書一四・三〜四）。

いま世界では（もちろん日本でも）まだまだ多くの女性が苦しみ、悩み、貧しさと病いの中にあります。その中であって、身を捨て、奉仕に尽す女性たちに、主の守りと励ましと導きが絶えずあらんことを、切に祈って今日の話を終えたいと思います。